

同志社とイエール大学

—一九〇一年前後の留学をめぐる—

小川 正道

I はじめに

二〇世紀を迎えた一九〇一年を前後して（一八八四年～一九二二年）、多くの同志社関係者（卒業者のほか、中退者、同志社校友会入会者）がイエール大学に留学し、神学をはじめ、哲学や心理学などを学んだ。この間、同大学に留学していた日本人の約五分の一を、同志社関係者が占めることになる。⁽¹⁾

この点に関連して、かつて杉井六郎氏は、新島襄とイエールとの関係などを踏まえた上で、明治期にイエールに学んだ日本人留學生のリスト（「イエール大学在籍者リスト」）、およびその「日本の大学出身別一覧」を示し、同志社が最多を占めていることをあきらかにして、「この一覧表はイエールに寄せていた同志社の志向を端的に示めているといつてよい」と指摘している。⁽²⁾近年では荒川歩氏が、同志社からイエールに派遣された森田久万人について、その留学の経緯や意義について、主に心理学の観点から考察を加え、同志社とイエールが密接な関係にあったことを示唆している。⁽³⁾

これらの成果などを用いて、筆者は拙著『明治日本はアメリカから何を学んだのか——米國留学生と『坂の上の雲』の時代』において、「同志社からイエールへ」と題する一節を設け、一九〇一年前後にイエールに留学した同志社関係者の概要を示すとともに、小崎弘道、横井時雄、原田助、森田久万人、浮田和民について、その経歴と留学の経緯を簡単にまとめ、留学の仲介役となったのは同志社側ではドウェイト・W・ラーネッド (Dwight Whitney Learned)、イエール側はジョージ・T・ラッド (George Trumbull Ladd) だったのではないかと、この仮説を提示した。⁽⁴⁾

ただ、この分析や仮説はあくまで新書の一節で示したものに過ぎず、十分な紙幅を割いて検討することはできなかったため、本稿では、一九〇一年前後にイエールに留学した同志社関係者について列挙した上で、個別の留学の経緯をできるだけ具体的にあきらかにし、留学の仲介役と留学の背景となった事象についても分析を加え、その留学の意義について若干の検討をしようとするものである。

II 一九〇一年前後にイエール大学に留学した同志社関係者

まずは、一九〇一年前後（一八八四年～一九二二年）にイエール大学に学んだ同志社関係者について、「イエール大学在籍者リスト」⁽⁵⁾から抽出して、さらに「イエール大学日本学生名簿」⁽⁶⁾、「同志社校友会便覧」⁽⁷⁾などによって補っておきたい。始点を一八八四年に置く理由は、イエールに留学した同志社関係者は一八八四年から在籍した中島力造をもって嚆矢とするためである。終点を一九二二年とするのは、「イエール大学在籍者リスト」が明治期のみ、すなわち一九一二年までを対象としている、という資料的制約による。⁽⁸⁾

以下、在籍年順に当該年間にイエールに留学した同志社関係者を列挙しておこう（カッコ内は在籍期間）。

- ・ 中島力造（一八八四年―一八八九年）
- ・ 重見周吉（一八八五年―一八九一年）
- ・ 湯浅吉郎（一八八八年―一八九一年）
- ・ 原田助（一八八九年―一八九一年）
- ・ 市原盛宏（一八八九年―一八九二年）
- ・ 森田久万人（一八八九年―一八九二年）
- ・ 広津友信（一八九〇年―一八九一年）
- ・ 足立通衛（一八九二年―一八九三年）
- ・ 青木要吉（一八九二年―一八九四年）
- ・ 浮田和民（一八九二年―一八九四年）
- ・ 小崎弘道（一八九三年―一八九四年）
- ・ 南熊夫（一八九三年―一八九四年）
- ・ 綱島佳吉（一八九四年―一八九六年）
- ・ 横井時雄（一八九四年―一八九六年）
- ・ 坂田貞之助（一八九五年―一八九九年）
- ・ 松本亦太郎（一八九六年―一九〇〇年）

- ・ 蔵原惟郭（一八九七年―一八九八年）
- ・ 白洲長平（一八九七年―一八九九年）
- ・ 山口精一（一八九七年―一九〇〇年）
- ・ 三宅亥四郎（一八九七年―一九〇一年）
- ・ 河邊治六（一八九七年―一九〇四年）
- ・ 横山昌次郎（一八九八年―一九〇四年）
- ・ 中瀬古六郎（一八九九年―一九〇一年）
- ・ 松本宗吾（一八九九年―一九〇一年）
- ・ 牧野虎次（一八九九年―一九〇二年）
- ・ 芦田慶治（一九〇一年―一九〇二年）
- ・ 村田勤（一九〇一年―一九〇二年）
- ・ 西池成義（一九〇一年―一九〇三年）
- ・ 楨和四郎（一九〇一年―一九〇三年）
- ・ 松尾音治郎（一九〇一年―一九〇四年）
- ・ 森次太郎（一九〇一年―一九〇四年）
- ・ 中村長之助（一九〇三年―一九〇四年）
- ・ 木下準一郎（一九〇四年―一九〇七年）
- ・ 村川章次（一九〇五年―一九〇七年）

・田中四郎（一九〇八年—一九〇九年）
・井上良民（一九一一年—一九一二年）

一八八三年まで皆無であった同志社関係者が、それ以降、急増しているのがわかる。特に、原田、小崎、横井、牧野は、同志社の社長あるいは総長を務める人物であり、この間のイエール留学が同志社の歴史において、少なからぬ意味を持っていることがうかがえよう。

III 留学の経緯

前章で列挙した人物のうち、留学の経緯がある程度判明しているケースについて、以下、在籍年に沿って検討していきたい。

同志社関係者としてはじめてイエール大学に学んだ中島力造は、同志社を中退した後、渡米、イエールはでまらず哲学を学んだ上で、ノア・T・ポーター（Noah Thomas Porter）教授（一八七一年から一八八六年まで学長）から哲学、倫理学を学んで、「カント思想体系の“Thing-in-itself”」の論文で哲学博士の学位を授与されている⁽⁹⁾。中島はポーターとの関係について、「嘗テイエール大学ニアリテ専ラ倫理学ヲ研究セシノ当時余ハ実ニ少ナカラサル先生ノ薫陶ヲ受ケシノミナラズ、日夜其警咳ニ接シテ諄々タル指教ヲ辱フセリ、温乎タル其容ハ今尚我ガ眼前ニ髣髴シ、凜乎タル其言ハ今尚我カ心裡ニ刻銘ス」と回顧している⁽¹⁰⁾。帰国後は帝国大学（のち、東京帝国大学）教授となつて倫理学を講じた。

重見周吉は同志社卒業後、イエールに留学してメデイカル・スクールに学び、医学博士の学位を得た。帰国後は学習院や東京慈恵医院医学校で教えながら、病院を経営している。⁽¹¹⁾湯浅吉郎は同志社を卒業して、ノースウェスタン大学などに学び、イエールの大学院で旧約聖書と古代語を専攻して、「箴言の分類」の論文で哲学博士の学位を取得した。帰国後は同志社神学校で教えている。⁽¹²⁾市原盛宏は熊本洋学校を経て同志社卒業後、仙台東華学校の校長となり、イエールに留学、経済学を専攻して、「日本の絹貿易」の論文で哲学博士の学位を取得した。帰国後は同志社政法学校の教授となっている。⁽¹³⁾

市原と同年にイエールに学んだ原田助（旧姓鎌田）も熊本洋学校出身で、同志社を卒業して神戸教会の牧師となる。原田の日記によると、一八八八年三月五日に同志社の宣教師でイエール出身のラーネッドのもとを訪れて「同氏ノ出身校[イエール]大学ノ事」について相談したところ、当初は留学に反対されたが、「八ヶ月乃至一年間実地上ノ学識ト経験ヲ得バ或ハ益アラント申サル」と賛意を示してくれた。イエールでは、湯浅、市原、森田久万人といった同志社関係者と交流を重ねている。⁽¹⁴⁾イエール神学校では神学や教会史などを中心に学んだようで、一八八九年十一月十日付の婚約者・川本佐喜子宛の書簡で、原田は次のように報じている。

日々ノ勉強ハ「イヤ」ナコトモナキニ非ズ然レドモ概シテ云ヘバ満足ナリ、ハリス教授ノ神学、フィッシャー教授ノ教会史ナド面白シ書籍ハ自由ナリ学ブコト多シ知リタキコトハ限りナシ書生ノ一生ハ愉快此上ナシ、然レドモ久シク山上ニ留マルヲ得ズ山下ニ降ルノ時忽チ来ラン今ハ勉強ノ時節ナリ⁽¹⁵⁾

サミュエル・ハリス (Samuel Harris) やンヨーシ・P・フィッシャー (George Park Fisher) などの薫陶を

受けた原田は、一八九一年に神学学士の学位を得て卒業し、帰国後は神戸教会の牧師などを経て、同志社社長に就任する。⁽¹⁷⁾

森田久万人は、熊本洋学校でクリスチャンとなり、同志社を卒業後、その教授となる。一八八九年、大学昇格の条件を整えるべく、同志社からイエールに留学生として派遣されるが、その目的は、心理学、倫理学、哲学、神学などの研究で、受け入れたのはラッドであった。荒川氏は、イエールを留学先に選んだ理由として、日本におけるラッドの評価の高さとラーネットの影響の二点を挙げている。森田はラッドのもつて、哲学、心理学、倫理学、経済学、社会学、生理学を学び、「仏教における靈魂の概念と比較したロツツエの靈魂の概念」の論文で哲学博士の学位を取得した。⁽¹⁸⁾一八九一年から翌年にかけては、イエールで東洋哲学の講師も務めた。⁽¹⁹⁾市原、湯浅、原田とはイエール在学中に交流しており、一緒に写真を撮っている。帰国後、森田は同志社神学校の教授となった。⁽²⁰⁾

森田と入れ替わりでイエールに入学した浮田和民も、熊本洋学校時代に受洗して、同志社を卒業後、その教授を経て一八九二年から留学している。同志社の学生時代、浮田はラーネットを高く評価していたといふ。⁽²¹⁾かねてから浮田には強い留学願望があったものの、資金問題や校務負担などで実現しなかったが、湯浅や森田、市原などのイエールでの成功に刺激を受け、ラッドの紹介で留学することとなった。浮田は後述の通り、同志社でのラッドの講義の通訳を務めているが、その際に、「先生の奨励によりて二学年間エル大学に於て余の専務たる政治学及び歴史を研究し、傍ら先生に就きて哲学を学ぶことを得たり」と浮田は述べている。⁽²²⁾イエールでは大学院で学者を目指して、主にラッドのもとで学び、哲学や歴史学、政治学を研究することになる。⁽²³⁾この間、浮田は、熊本バンドの基礎を築いたリロイ・L・ジェーンズ (Leroy Lansing Jones) の処遇をめぐって、アメリ

カン・ボードを厳しく批判し、アメリカの宗教、道徳、社会の現状についても痛撃した。この結果、宣教師など周囲から猛烈な反発を受け、一八九四年に帰国を余儀なくされる。その後、浮田は同志社政法学校の教師を経て、東京専門学校（のち、早稲田大学）の教授となる。⁽²³⁾

ラッドは後述の通り三度の来日を果たし、その際の講演録も多数刊行されているが、講演の通訳の任を担った一人が、浮田であった。ラッドは、「浮田和民氏——現在は早稲田大学で社会学の教授を務めている——は、私が知る限り、もつとも優れた通訳であり、英語の講義を流ちょうでエレガントな日本語にし、二つの言語の構造や特質の大きな相違を残しつつ、スピーチを正確に転換させ、独自の解説を加えた」と絶賛している。⁽²⁴⁾ こうした高評価の結果、ラッドが浮田にイエールに留学するよう「奨励」したのであろう。

浮田のイエール在学中に留学してきたのが、やはり熊本バンドの一員で、同志社の卒業生であり、当時同志社の社長を務めていた小崎弘道である。一八九五年四月二十五日付で小崎が記した「同志社報告」には、「一昨年の初めに当り偶々米国イエール大学の教授ラッド氏より余に米国遊学を勧奨するの書に接したり其後シカゴ万国宗教会よりも之に出席すべき招状を受けたりしかば此機に乗じ平日の志望を果さんとて之を社員諸氏に図りたるに同年四月に開会せし社員会は余に許すに凡そ一ヶ年間の外遊を以てせり」とあり、一八九三年のはじめにラッドから留学を「勧奨」されていたことがわかる。⁽²⁵⁾ かくして、アメリカで開かれた万国博覧会にあわせて企画された万国宗教会に出席するため渡米した小崎は、一八九三年十月から翌年六月までイエールに在学した。留学当時について、小崎は後年、次のように回顧している。

イエール大学に入学したのは十月末で、翌年六月中旬迄約八箇月間在学した。其間主として研究したのは神学

の外ラッド博士の下にてカントの哲学と宗教哲学とを学んだことである。当時神学校は教会史の教授フイツシャーの全盛時代で、其該博なる知識と卓越せる才能を以てエール大学は勿論英米の学者間に頭角を現し、勢力侮る可らざるものがあつた。神学生等の彼に冠した渾名は「法王」と云ふのである。：ラッド教授の下で学んだのは第一カントのプレロゴミナ、次は純理批判、終が審美批判である。私が此間エール大学に学び得たのはラッド教授の斡旋に係る奨学金の恩恵である。

留学を「勸奨」したラッドは、小崎に哲学を教授するとともに、奨学金の給付も斡旋した。小崎はフイツシャーをはじめ、ハリス、ジョージ・B・ステイーブンス (George Barker Stevens)、フランク・C・ポーター (Frank Chamberlain Porter) といった神学・聖書神学の教授陣からも、大きな影響を受けた。⁽²⁷⁾

小崎の帰国と同年にイェールに留学したのが、小崎の後任として同志社社長となる横井時雄である。横井も熊本洋学校を経て、同志社を卒業後、同志社教授、本郷教会牧師を務め、一八九四年からイェールで哲学や史学を専攻したという。ラッドに師事していたとみてよからう。帰国後、小崎の後を受けて一八九七年に同志社社長に就いた。⁽²⁸⁾

横井と入れ替わる形でイェールに留学した松本亦太郎は、同志社を経て帝国大学の大学院に学んだが、一八九二年にラッドが来日して帝大で講演し、これを聴講した。松本は、「ラッド教授が帰る時私は船まで見送つて別れを告げ且海外留学の志あることを話したら、先づエール大学に来てはどうかと云ふことを言はれた。ラッド教授は此時の言をよく記憶されてゐて、明治二十九年に私がエール大学に行つた時は攻学に関し種々同情援助を与へられた」と述懐している。⁽²⁹⁾ この留学の結果、松本は「聴覚空間の研究」の論文でイェールから哲学博士の学

位を取得、その後、東京帝国大学に心理学実験室を設けることになる。⁽³⁰⁾

松本とはほぼ同時期に留学した三宅亥四郎（旧姓鎌田・原田助の実弟）も、ラッドの指導を受けた。同志社を卒業後、一八九七年から四年間イエールに在籍、エドワード・W・スクリップチャー（Edward Wheeler Scripture）の指導下で心理学を専攻し、「律動的行動の研究」の論文で哲学博士の学位を取得している。在学中はラッドの哲学研究会にも出席し、カントやヘーゲルの著作を研究したという。受講者はあらかじめラッドの課した課題について論文を提出し、これに出席者が意見を述べて、ラッドが批評する、という授業であった。三宅は、「教場以外に於て教授の教を乞ふ機会は少くなかつた」と回想し、「イエール大学に学びたる我国の学生にして教授の御世話にならなかつたものは少からう」とも述べている。⁽³¹⁾ 帰国後、三宅は早稲田大学や第六高等学校の教授などを務めた。

三宅とともにラッドの指導を受けたのが、河邊治六である。帰国後、慶應義塾大学教授として哲学、倫理学を担当することになる河邊は、同志社卒業後、イエール神学校を経て、大学院で哲学を専攻し、「朱子の哲学の影響下における日本の儒学の発展」の論文で哲学博士の学位を取得した。⁽³²⁾ イエール時代のラッドの研究室の様子や、「博士の講義の大部分は哲学専攻の学生に向つて研究会に於て為されたものである」として、夜遅くまで約三十名の学生が参加したラッドの研究会について回顧しており、研究会のテーマはカント、アリストテレス、心理学といった幅広い範囲にわたつたという。河邊は「日本留学生に対して博士が如何に親切であつたか」も強調している。⁽³³⁾

同志社卒業後、同志社予備校の寮長や土佐キリスト教会の伝道師などを経て、一八九九年からイエール神学校に留学した牧野虎次は、留学の動機について、次のように振り返っている。

私は同志社在学当時から、修学の仕上げは北米イェール大学でと決めて居た。それは同志社学界の最高峯的存在のラルネデ博士の母校であり、在日宣教師間に親日家で知られたデフォレスト博士の母校でもあった上に、同志社での大先輩市原盛宏、森田久万人、両氏始め原田助、綱島佳吉等諸牧師の後を追いたいからだった。殊に新英州の清教徒的雰囲気が何よりも慕わしく思われた。

ラルネデとはラーネッド、デフォレストとは、ジョン・K・H・デフォレスト (John Kinne Hoyde Deforest) のことである。留学にあたっては、イェールから帰国の途上にあつた同志社出身の坂田貞之助が、イェール神学校のベンジャミン・W・ベーコン (Benjamin Wisner Bacon) と連絡を取ってくれたという⁽³⁶⁾。坂田は自分の働き口まで譲ってくれ、それによって「一層私はイェール大学の留学を決心する事が出来た」と牧野は回想している⁽³⁶⁾。一八九九年、ベーコンを窓口⁽³⁶⁾に、イェール神学校に入学した牧野は、一九〇二年に卒業した。留学中の日記 (一九〇一年〜一九〇二年) には、ほぼ同時期に同志社からイェールに留学していた村田、榎、松尾、西池の日々の金銭出納が細かく記録されており、牧野が出納係のような役割を担っていたことを伝えている⁽³⁷⁾。帰国後、牧野はキリスト教雑誌の編集や日本基督教組合教会本部総幹事などを経て、一九四一年に同志社総長に就任する⁽³⁸⁾。

牧野と同じ年にイェールに入った中瀬古六郎は、同志社卒業後に同志社ハリス理科学校助手を務めて渡米、ジョン・ホプキンス大学において有機化学の研究で博士学位を取得し、さらにイェールの大学院で生理化学を専攻して、一九〇一年に修士の学位を得た。帰国後は同志社で教育・研究に従事し、化学者、科学史家として多くの著作を残すことになる⁽³⁹⁾。

中瀬古が卒業した一九〇一年、イエール大学は創立二〇〇周年を迎え、記念式典で伊藤博文と鳩山和夫に名誉博士の学位が授与されているが、⁽⁴⁰⁾三宅によると、二人に学位を授与するよう斡旋したのはラッドだったようで、「イエール大学が伊藤公と鳩山博士に与へたについては、ラッド教授の斡旋に依るところ、大なるものがあつたと私は信じてゐる。これより七八ヶ月以前であつたと思ふが、誰か日本人にこの学位をイエール大学が授けるとの噂のあつたころ、私はラッド教授に鳩山博士其他二三のエル出身の日本人の名士の履歴の調査を委託されてこれを英文に草して教授に差上げた」という。⁽⁴¹⁾ラッドと伊藤には親交があり、のちに韓国統監として伊藤が渡韓する際には、ラッドが招かれて同行し、現地を視察している。⁽⁴²⁾

IV 仲介役と留学の背景

前章での検討から、イエール大学側の受け入れを担っていたのが、主にラッドであることは、間違いない。ラッドは同志社関係者をイエールへの留学に勧誘・奨励し、奨学金の給付を斡旋して受け入れたほか、彼らに哲学や心理学などを教え、多くの同志社関係者に影響を与えた。

ラッドは、一八四二年一月十九日にオハイオ州で生まれ、一八六四年、ウエスタン・リザーブ・カレッジを卒業し、アンドーヴァー神学校に進学、一八六九年に同校を卒業した。一八八一年にイエールに着任、一九〇五年に名誉教授となるまで、教授として教鞭を執ることとなる。頻繁に来日して講義を行ったことでも知られ、一九二一年八月八日に死去した。⁽⁴³⁾

イエールでは哲学部の教授を務めたが、神学者でもあり、また心理学者でもあつて、心理学の大学院ができる

と、そちらの講座も担当したという。はじめて来日したのは一八九二年で、その後も、一八九九年、一九〇六年から一九〇七年にかけて、とラッドは合計三度の来日を果たしている。⁽⁴⁴⁾

ラッドはイエルで日本人留学生と接するなかで、次第に日本人に好意を抱き、支援するようになっていったようである。松本は、「ラッド教授が日本及び日本人に対し興味を有し始めた事に就て私は嘗て教授に尋ねたことがあつたが、特殊な理由があつて始まつたのでは無いとラッド教授は言つた」とした上で、明治初期以来、多くの優秀な日本人留学生がイエルに学ぶなかで、「イエル大学の教職員中には自然に日本人に対し興味を感じ、其修学に対し種々の好意を表する人があつた、而してラッド教授も其一人であつた。教授は種々なる日本学生を相手にしてゐる間に漸次日本人に対し友愛の情を有するに至り、亦一方に於て自身尽力して日本学生奨学基金なるものを作り、優良の学生にして学資の十分ならざるものを援助する事さへ試みた」と述べている。⁽⁴⁵⁾ 三宅も同様に、「私がイエル大学に居た頃には同大学の教授中日本学生に深厚なるインタレストを有するは独りラッド教授のみではなかつた」としつつ、「然かしラッド教授のやうに日本人の性情を良く理解した人は稀れである：教授が日本人は愛する情は実に濃厚であつた」と証言する。⁽⁴⁶⁾ ラッド自身、一九〇八年に発表したエッセイのなかで、「何千もの日本の若者がアメリカに来て、あらゆる機関で、すべての学科を学び、アメリカの教師たちに敬意と愛情を抱きながら、母国に帰って行つた：私自身も、日本人のように賞賛し、感謝に値する学生のクラスを持つたことがない、と証言できる」と記している。⁽⁴⁷⁾

そんななかで、一八八〇年代以降、同志社関係者と出会つて、やはり好意を抱き、同志社との接点を深めていたものと思われる。姜克實氏は、「中島を始め同志社出身者の優秀さは、彼らの指導に当たっているラッド教授の心を引きつけ、ラッドの来日のきっかけを作つた、といわれる」と指摘している。⁽⁴⁸⁾ 中島自身は、「予のイエル

大学に在るや、同教授は未だ認識論を開講せられざりし、故に予は其高見を謹聴する能はず」と述べているので、学生時代はラッドから教えを受けたわけではなかったようだが、帰国後、ラッド来日の際に講演録の校閲を担うなど、浅からぬ関係を築いていった。⁽³⁰⁾浮田もラッドの二度目の来日の際、「是より先き多年の間中嶋博士の如きは日夕先生に親接して先生に学び、又た自からも先生に学ばるゝ所の材料となられた」と述べている。⁽³¹⁾いずれにせよ、ラッドは、中島がポーターのもとで博士学位を取得していくのを見ていたであろうし、湯浅や市原、森田といった同志社関係の初期イエール留学生が次々と博士学位を取得していった過程にも、時にイエールの一教員として、時に指導教授として際会していた。そうしたなかで、同志社に対する評価を高めていったことは、想像に難くない。

かくして、はやくも初来日の際には、イエール留学中の森田がその情報を同志社に伝えて招聘手続きがはじめられ、社長の小崎がラッドに招待状を送付、宗教的、政治的、知的なカオスのなかにある日本人を光の道に導いてほしいとして講義を依頼し、実際にラッドは同志社で宗教哲学の講演を実施、その通訳を浮田が務める、といったかたちで、同志社との関係が顕在化している。⁽³²⁾新島自身、アメリカ留学時代にハーバードよりもイエールと近い関係をもっており、⁽³³⁾また、ラッドはアンドーヴァー神学校で新島と会っていたようで、同志社での講演の冒頭で、次のように述べている。

余ハ先づ同志社とイエール大学の間に親密なる關係を生じたるを祝す貴校教員諸君中にも我が大学の卒業生あり我が大学に於ても貴校教員の勉強しつゝあるものあり又故新島君アンドウアにありて基督教信徒の表白をせられたる時恰も余ハ同校に在りき今後永く諸君の記憶に存せられんことを希ふ⁽³⁴⁾

ラッドは一八八一年から一九〇五年までイエールに在職したが、同志社関係者はこの時期に集中して留学しており、まさに「同志社とイエール大学」の間に親密なる関係⁽³⁵⁾を促進する立役者としての役割を担っていく。

ここでラッドが述べている、「貴校教員諸君中にも我大学の卒業生あり」とは、ラーネットのことを指しているものと思われる。このラーネットが、同志社側からイエールに留学生を送り出す上で、重要な役割を果たした人物である。牧野は、ラーネットが「イエール大学出身で、生粋なるニュー・イングラダーたる先生は、何時もデモクラシーの倫理思想を奨励して居られた」と印象深く振り返っており、先述の通り、ラーネットやデフォレストの影響を受けて、イエール留学を決意したと述べている。

香川孝三氏は、「同志社で教鞭をとっていたラーネット博士の母校がイエール大学であったために、同志社出身者がイエール大学に来ていた」と述べ、関西学院から渡米し、イエールに学んだ政尾藤吉とほぼ同時期にイエールに在学していた横井、綱島、坂田、白洲、山口、三宅の名前を挙げて、その略歴を紹介している。⁽³⁶⁾ラーネットの影響は同志社開学当初から存在していたようで、杉井氏は、一八七九年の同志社第一回卒業式での卒業演説で山崎為徳が、同志社が日本のイエール、アンドーヴァーとなることを期待すると述べたことを受けて、「これは当時の同志社学生が抱いたイエール大学像の端的な表白の一つであり、それがイエール大学の卒業生であるラーネット D. W. Learned の影響の強かったことは否みえない」と指摘している。⁽³⁷⁾

ただ、ラッドの行動が、奨学金給付の斡旋や留学の勧誘、奨励、学問の教授といった「動的」側面が強かったのに対し、ラーネットの影響は、より「静的」である。ラーネットは原田の留学に当初は反対しているし、積極的に同志社の学生や卒業生に声をかけ、イエールに送り出したという形跡は、ほとんどみられない。⁽³⁸⁾同志社に学んだ人びとが、ラーネットの人格や学識を尊敬し、ラーネットのようになりたい、その母校で学びたい、といっ

た影響を受け、それがイエール留学の動機となったものと思われる。例えば、一八九四年からイエールに留学した綱島は、一九二八年にラーネッドが離日する際に英文で記した告別文で、次のように述べている。「三十五年前にイエールで学んだとき、私は、豊かなアメリカと世界に送り出された、イエールのよき教え子たちのたしかな流れを感じていた。ラーネッド博士は、イエールの著名な教え子の一人であった。：私は、彼の母校であるイエールが、日本にそのよき教え子の一人を送ってくれたことに敬意を表する」⁽³⁹⁾。

ラーネッドは、一八四八年十月十二日、コネチカット州で生まれ、一八七〇年にイエール大学を卒業し、一八七三年には同大学院で哲学博士の学位を取得した。一八七五年に來日、翌年から同志社の教授を務める。一八八六年にはイエールから神学博士の学位を授与され、一九一九年には同志社大学長にも就任し、一九四三年三月十九日にアメリカで没した⁽⁴⁰⁾。

では、なぜ一八八四年以降に、同志社からイエールへの留学生が急増したのか。一つの要因として、イエールの学長だったポーターと新島が親密な間柄にあったことがあげられる。一八八五年一月には、ポーターが北米滞在中の新島に、すでにニューヘイブン (New Haven) にいた重見の処遇と、中島の様子を伝える書簡を送っており、新島が渡米に際し、彼等の留学についてイエール側に斡旋した可能性が考えられる⁽⁴¹⁾。また、中島や重見、湯浅、市原や森田などが、博士学位を取得するといったかたちで留学の成果を結実させ、それが後輩にとつてよき「模範」「先例」となった。牧野が、市原や森田、原田、綱島の「後を追いたい」と考えてイエール留学を決意したこと、浮田も、湯浅や森田、市原などのイエールでの成功に刺激を受けて留学したことは、先述の通りである。主な受け手のラッドのイエール着任が一八八一年であり、同志社関係者に関心を示しはじめたのが、中島が留学した一八八四年以降であったことも、無視できない。一八八九年の森田の留学以降、ラッドは積極的に同

志社関係者を受け入れていった。

同志社側の事情に目を向けると、特にクリスチャンや神学との関係で大きな契機になったと思われるのが、一八九九年の大日本帝国憲法制定である。その第二十八条で信教の自由が定められたことを受けて、同志社関係者たちが、かつて新島が理想郷として思い描き、学んだアメリカに旅立ちやすくなったことは、容易に想像されよう。実際、渡米中に憲法制定の報に接した原田は、その日記（一八八九年二月十三日条）に「憲法発布セラレタリ：信教出版演説ノ自由ヲモ認許セラレリタリ云々、電文簡短ニシテ詳細ヲ知ル能ハザルモ日本歴史上特筆スベキ一大事ト云ハザルベカラズ、伏シテ上帝ニ感謝シ且祈ル」と記している⁽⁶⁵⁾。一方、『同志社百年史』が指摘する、「一八九〇年代に天皇制国家主義が急速に興隆し、教育勅語にもとづく臣民道徳が強調された。人びとはキリスト教を日本の伝統的習俗やそれに立脚する臣民道徳に合致しないものとして非難攻撃した」といった日本国内の状況から、「脱出」したい、という指向性もあつたと思われる。小崎がラッドへの招待状に記したような、思想的混沌からの「脱出」という背景もあつたであろう。

こうして、ラーネットの影響が同志社関係者をイエールに向かわせ、彼らを主にラッドが窓口となつて受け入れることとなつたわけだが、ラッドは哲学や心理学を担当しており、同志社関係者にも哲学、心理学を中心に教授した。神学についても、日本人留学生や同志社に好意的な教授がいたのである⁽⁶⁷⁾。結果として、ラーネットが同志社関係者に与えた影響は大きく、イエールから授与された神学博士の学位も、「博士の教育的功勞に対する名誉学位」⁽⁶⁸⁾であつたというから、留学への貢献の延長線上で実現したものと考えられる。なお、大塚達也氏は、ラッドの初来日は、「同志社の欧米のおそらく神学者たちの招聘計画によるものであつた」と指摘しているが、この「神学者たち」にはラーネッドも含まれていたにちがひなく、両者の間には何らかの交遊関係があつた可能

性も否定できない。

なお、新島もラッドのことはよく認知していたものと思われる。一八八九年十一月十日に森田は、新島に宛てた書簡において、ラッドは哲学的・カトリック的で、特定の学問分野の研究者を超えたスターであり、「イエールの自由思想家」だと紹介している^⑩。新島がラッドに好感を抱いたとしたら、それも同志社関係者がラッドのもとで学ぶひとつの原動力になったにちがいない。

V むすび

一九〇一年前後に同志社からイエール大学に学んだ日本人留学生たちが、現地で学んだ神学や哲学、心理学などの宗教的・学術的意義については、それぞれの専門分野の研究者の検討に委ねるほかはないが、帰国した留学生たちが、同志社や早稲田、慶應義塾などの私学や官立高等学校、帝国大学などで教鞭を執り、その後の各学問分野の基礎を築いていったことを考えると、彼らの留学の意義は決して小さくはなかったといえよう。例えば心理学においては、松本がイエールで、ラッドが呼び寄せたエドワード・W・スクリプチャーから実験心理学の基礎を学び、その後の日本の心理学界に大きな影響を与えたことが、あきらかにされている^⑪。

同志社では、イエール留学生から、小崎、横井、原田、牧野と、四代の社長・総長を輩出したことは、その歴史において大きな意味を持つと思われる。例えば小崎は、アメリカ滞在中に国内外の知識人と意見を交換し、学校を大学とするためには、「伝道会社から独立」しなければならぬというアドバイスを受けた。帰国後、同志社はアメリカン・ボードからの寄付金と派遣教師の謝絶を決議することになり、自立を求められた同志社は、尋

常中学校の設立を企図する。教育勅語に基づく道徳教育を求める政府の基準に対応することが求められ、聖書の利用や式典での祈祷が取りやめられたが、ボードとの決裂をめぐって社内が対立、これが小崎の辞任につながっていく。⁽²⁾ その意味でも、同志社のひとつの画期につながる渡米であった。

ラッドに目を向けてみても、同志社関係者をはじめとする日本人留学生を高く評価したことで、留学生をイェールに積極的に受け入れてこれを支援し、教育し、さらには三度にわたって来日して、同志社や日本と深い関係を持つこととなった。イェール大学創設二〇〇周年に際して、伊藤博文と鳩山和夫に名誉博士の学位を授与する幹旋をしたのも、その過程の出来事であったし、二〇〇年祭に際してラッド宅で撮影された記念写真には、ラッド夫妻と鳩山夫妻を囲んで、芦田、河邊、西池、楨、牧野、松尾、村田、森といった同志社関係者が写っている(写真)。ここからも、ラッドが、同志社とイェールの結節点となっていたことが理解されよう。

この二〇〇周年記念式典に伊藤が出席したことが、日米外交において大きな意味をもったことは、すでにあきらかにされている。伊藤は「文明」の普及という使命をイェールから託され、その実践に取り組んでいった。⁽³⁾ 三年後に発生した日露戦争では、伊藤の意を受けて渡米した金子堅太郎が、この戦争を「文明」国対「野蛮」国と位置付けて積極的な広報外交を展開し、セオドア・ローズヴェルト (Theodore Roosevelt) 大統領の仲介を引き出すことに成功し、その際に金子は、「文明」国の象徴として、日本国内でロシア正教



ラッド宅での記念写真 (1901年10月23日撮影、
「[写真] (エール大学 日本学生)」同志社社史資料センター所蔵、額屏-165)。

が保護されていることを挙げた。⁽⁷⁴⁾日本の仏教・神道・キリスト教の指導者たちは、ロシアの喧伝する「キリスト教」対「異教徒」という構図を打ち消し、「文明」のための戦争であることを宣言するが、その先頭に立った一人が、小崎であった。⁽⁷⁵⁾

ラーネツドが同志社で、ラッドらイエールの教授陣がニューヘイブンで伝授した信仰と学問。それは、二十世紀の日本が生きていく上で必須となる「文明」の一面を示すものであった。

(注)

- (1) 杉井六郎「イエールの日本人」『同志社アメリカ研究』(第一三号)(同志社大学アメリカ研究所、一九七七年)、七二〜九三頁。
- (2) 前掲「イエールの日本人」、六九〜九三頁。
- (3) 荒川歩「同志社英学校からイエール大学のラッドの元への森田久万人の派遣とその成果」『心理学史・心理学論』(第五号)(「心理学史・心理学論」刊行会、二〇〇三年)、一五〜二二頁。
- (4) 拙著『明治日本はアメリカから何を学んだのか——米留學生と『坂の上の雲』の時代』(文春新書、二〇二一年)、第四章第一節「同志社からイエールへ」。
- (5) 前掲「イエールの日本人」、七二〜九一頁。
- (6) 「エール大学日本學生名簿」(Yale University, Sterling Memorial Library, Manuscripts and Archives Group Number 40, Kan'ichi Asakawa Papers [朝河貫一文書]、Series No. III Box 60, Folder No. 296)。
- (7) 今井隆吉編『同志社校友会便覧』(同志社校友会、一九二四年)、一〜一六三頁。
- (8) 前掲「イエールの日本人」、七一〜九一頁。
- (9) 佐野安仁「同志社人物誌(七〇)中島力造」『同志社時報』(第九四号)(同志社、一九九二年)、一四三頁、前掲「イエールの日本人」、八三頁。
- (10) 中島力造「故エール大学總長ノア、ポーター先生」『國民之友』(第一五三号)(民友社、一八九二年)、六六〇頁。

- (11) 菅紀子「漱石のライバル重見周吉―イエール大学ほか新資料から見える人物像」『松山大学論集』(第三〇巻一号)(松山大学学術研究会、二〇一八年四月)、三四六―三六六頁、前掲「イエールの日本人」、八六頁。
- (12) 湯浅永年「同志社人物誌(二) 湯浅吉郎」『同志社時報』(第二四号)(同志社、一九六七年)、四三頁、前掲「イエールの日本人」、九一頁。
- (13) 田中良一「同志社人物誌(一六) 市原盛宏」『同志社時報』(第一六号)(同志社、一九六五年)、五二頁、小野英二郎「故市原盛宏君略歴」(市原宏編『故市原盛宏記念』市原宏、一九一六年)、六―一二頁、前掲「イエールの日本人」、七五頁、田中良一「蔵原惟郭と市原盛宏―その人となりと業績」同志社大学人文科学研究所編『熊本バンド研究―日本プロテスタントイズムの一源流と展開』(みすず書房、一九六五年)、三九七―四一三頁。
- (14) 原田健編『原田助遺集』(河北印刷、一九七一年)、六一―九五頁。傍線原文。
- (15) 前掲『原田助遺集』、二七〇―二七二頁。傍線原文。
- (16) 現在、原田のイエールにおける教会史と実践神学の受講ノートが残されている(「エール大学 Y. H. T. 教授の教会史講義の筆記(明治三二年)」同志社社史資料センター所蔵、Y/HT、「エール大学 Braslow 教授の実践神学講義の筆記(明治三二―三四年)」同志社社史資料センター所蔵、Y/HT)。
- (17) 沖田行司「原田助―国際主義を唱えた同志社人」沖田行司編『新編同志社の思想家たち』上(晃洋書房、二〇一八年)、一三二―一五三頁、前掲「イエールの日本人」、七三頁。
- (18) この論文をタイプ打ちして製本したものが現存しており、全三二四頁に及んでいる(「中瀬古六郎関係資料」一六〇/三三三、同志社社史資料センター所蔵、分一三五八―一七)。森田がイエールでラッドやウィリアム・G・サムナー(William Graham Sumner) などから受けた講義ノートもあり、熱心に講義を聴いていたことがうかがえる(「中瀬古六郎関係資料」二九〇/三三三、同志社社史資料センター所蔵、分一三八五―一四〇、分一三八五―二〇二二)。
- (19) 森田による東洋哲学の講義用ノートが現在、残されている(「中瀬古六郎関係資料」一六〇/三三三、同志社社史資料センター所蔵、資料番号・分一三五八―一四一・二一三・一四一・一五・一六)。
- (20) 前掲「同志社英学校からエール大学のラッドの元への森田久万人の派遣とその成果」、一五―一七頁、前掲「イエールの日本人」、八二頁、今谷逸之助「森田久万人の哲学」『キリスト教社会問題研究』(第七号)(同志社大学人文科学研究所、一九六三年)、五

五〇九頁。

- (21) 浮田はラーネットの著作の翻訳を手がけている(ラルネット著/浮田和民訳『経済学之原理』経済雑誌社、一八九六年)。
- (22) 浮田和民「ラッド先生の来朝」『教育公報』(第二二七号)(帝國教育会、一八九九年)、一〇二頁。
- (23) 浮田の日記には、一八九二年九月二日にニューヘイブンに到着し、二九日に学期が開始、一〇月一日に「初メテ出席 ラッド哲学入門」と記されている(『明治二十年記憶帳』『浮田和民関係資料』同志社大学人文科学研究所蔵、明治二十五年八月二九日～二月一六日条、資料番号・115)。留学中は体調不良に悩まされ、翌年一月の日記には「余程ヤセタレバ万ハ速ニ帰国ヲ決行スルコトアル可シ…病人タルヲ免カレズ異郷之客トナリ屢々病ニ罹ル何ゾ愛愁ニ堪ヘン」などと記述されている(『在米日誌』前掲『浮田和民関係資料』、明治二十六年一月条、資料番号・116)。浮田が留学中につづった妻いづめ宛の書簡も多数残されている(浮田いづめ宛浮田和民書簡、同前、資料番号・51211～59)。
- (24) 姜克實「浮田和民の思想的・倫理的・帝国内主義の形成」(不二出版、二〇〇三年)、二六六～三〇〇頁、榎本恵理「浮田和民——「反宗教家」「全教育家」として」前掲『新編同志社の思想家たち』上、八六～一〇七頁、平林一「浮田和民と徳富蘇峰——若き日の思考と論理」前掲『熊本バンド研究——日本プロテスタントイイズムの一源流と展開』、四一四～四一五頁、松田義男「浮田和民研究——自由主義政治思想の展開」(松田義男、一九九八年)、二六八頁、前掲「イエールの日本人」、八九頁。
- (25) George Trumbull Ladd, *Rare days in Japan* (New York: Dodd, Mead and Company, 1910), p. 105.
- (26) 小崎弘道「同志社報告」(『同志社明治廿七年度報告』同志社、一八九五年四月二五日)、一頁。
- (27) 小崎弘道「小崎全集」第三卷(自叙伝)(小崎全集刊行会、一九三八年)、七八～九二頁。現在、小崎がイエール神学校で受講して作成したフィッシャーの「教理史」「キリスト教神学史」、ポーターの「旧約聖書神学」「新約聖書神学」、およびラッドの「カント・セミナー」などの講義梗概ノートが残されている(『小崎弘道自筆集』第一七・一八・二〇巻、同志社大学神学部所蔵)。
- (28) 辻橋三郎「横井時雄と『時代思潮』——政治家横井のプロフイール」(前掲『熊本バンド研究——日本プロテスタントイイズムの一源流と展開』、三三二頁、前掲「イエールの日本人」、九〇頁)。
- (29) 松本亦太郎「ラッド教授を追憶す」『心理研究』(第二〇巻一一八号)(心理研究社、一九二一年)、二五二頁。
- (30) 高砂美樹「G・T・ラッドと日本の心理学」『心理学ワールド』(第五六号)(日本心理学会、二〇二二年)、二～三頁、鈴木祐子「日本におけるラッドの心理学——三度の来日をまじえて考える」『日本の現代心理学形成にかかわる学問史的検討』科学研

費補助金報告書〈基盤研究(B)〉(一) 課題番号一〇四一〇〇二四、研究代表・西川泰夫、二〇〇一年、二五七〜二七〇頁、前掲「イエールの日本人」、八〇頁。

(31) 前掲「イエールの日本人」、八一頁。

(32) 三宅亥四郎「ラッド教授の回想」『心理研究』(第二〇卷一一八号)(心理研究社、一九二二年)、二六二〜二六四頁。

(33) 前掲「イエールの日本人」、七七頁、柴田隆行「日本の哲学教育史(下の二)」『井上円了センター年報』(第一三号)(東洋大学井上円了センター、二〇〇四年)、一一八頁。

(34) 河邊治六「ラッド博士を追想す」『心理研究』(第二〇卷一一八号)(心理研究社、一九二二年)、二五七〜二六一頁。

(35) 牧野虎次「針の穴から」(牧野虎次先生米寿記念会、一九五八年)、一五〜一六頁。

(36) 藪崎吉太郎編『牧野虎次先生自叙伝』(藪崎吉太郎、一九五五年)、二九頁。

(37) 「牧野虎次日記帳(明治三四年)」(同志社史料資料センター所蔵、Y/MT/5)。

(38) 前掲「針の穴から」、一八〇〜一八三頁、前掲「イエールの日本人」、七九頁。

(39) 末光力作「同志社人物誌(五〇) 中瀬古六郎」『同志社時報』(第七三号)(同志社、一九八二年)、七一〜七三頁、前掲「イエールの日本人」、八三頁。

(40) 拙稿「伊藤博文への博士号授与と日米外交―「文明」の普及をめぐる―」『法学研究』第八七卷一〇号、慶應義塾大学法学研究会、二〇一四年)、一〜三頁。

(41) 前掲「ラッド教授の回想」、二六四頁。式典にあわせて催された二〇〇年祭の模様については、当時留学していた森次太郎の回想がある(森次太郎『欧米書生旅行』博文館、一九〇六年、二四〜三〇頁)。

(42) 前掲「ラッド教授を追憶す」、二五五頁。

(43) "George Trumbull Ladd papers" (<https://archives.yale.edu/repositories/12/resources/3313>, accessed December 1 2020). ラッドの心理学、および日本に与えた影響に関しては、前掲「日本におけるラッドの心理学―三度の来日をまじえて考える」(二五七〜二七〇頁、前掲「ラッド教授を追憶す」、二四二〜二六一頁など、参照)。

(44) 前掲「G・T・ラッドと日本の心理学」、二〜三頁。

(45) 前掲「ラッド教授を追憶す」、二五〇〜二五一頁。一八九九年にラッドが勲三等を授与された際の叙勲申請書によると、ラッ

- ドが設けた日本学生奨学基金とは、「同大学ニ遊ヘル優等学生ノ為ニ七カ年毎ニ私費五千弗ヲ積立置キ其学資トシテ之ヲ給与ス」るもので、ラッドは「此他本邦学生ニシテ資力ナキ者ノ為ニ前記金額ノ外別ニ自ラ其授業料（一ヶ年百弗）ヲ給与」していたと云う（JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. A10112504300「叙勲裁可書 明治三十二年 叙勲卷一 外国人（国立公文書館）」）。なお、新島は一八八五年の段階で、ジョンズ・ホプキンス、イエール、アマースト、の各大学に留学するための奨学金を同志社に設ける構想を抱いており、この件についてイエールのポーター学長に話して、賛成を得たと、同年五月二六日付の書簡に記している（新島襄全集編集委員会編『新島襄全集』第六卷・英文書簡編、同朋舎出版、一九八五年、二六八―二六九頁）。この構想が実現したかどうか定かでないが、実現していた場合、同志社関係者のイエール留学を後押しするものになったに違いない。
- (46) 前掲「ラッド教授の回想」、二六三―二六四頁。
- (47) George Trumbull Ladd, "America and Japan", *International Conciliation*, Series 1, No. 2 (June 1908), p. 9.
- (48) 前掲「浮田和民の思想的的研究——倫理的帝国主義の形成」、二二八、二九七頁。
- (49) 中島力造「凡例」（ラッド著／中島力造抄訳『認識論』富山房、一八九八年）、二頁。
- (50) 坂野鉄也「谷本富の「新人物論」における商業道德論——中島力造、ジョージ・トランブル・ラッドとの比較」『滋賀大学経済学部 Working Paper series』（第二二二二号）（滋賀大学経済学部、二〇一六年）、一―二二頁。
- (51) 前掲「ラッド先生の来朝」、二頁。実際、中島は原田に、ラッドの演説予定について伝えている（一八九九年一〇月一四日付 原田助宛・中島力造書簡、同志社大学同志社社史資料センター所蔵、新島遺品庫資料・下・1914）。
- (52) 小崎弘道「同志社報告」（同志社明治廿五年度報告）同志社、一八九三年三月三十一日、一頁。前掲「日本におけるラッドの心理学——三度の来日を交えて考える」、二五八頁。前掲「同志社英学校からイエール大学のラッドの元への森田久万人の派遣とその成果」、一七頁。
- (53) 前掲「イエールの日本人」、七〇―七一頁。
- (54) ラッド述『宗教哲学』（福音社、一八九二年）、一頁。傍線原文。
- (55) 住谷悦治『ラーネッド博士一人と思想』（未来社、一九七三年）、六〇頁。
- (56) 香川孝三『政尾藤吉伝——法整備支援国際協力の先駆者』（信山社出版、二〇〇二年）、三八、五八―五九頁。
- (57) 前掲「イエールの日本人」、七一頁。

- (58) ただ、心理学研究を主な目的としていた森田の留学にあたっては、同志社の宣教師であるマークウイス・L・ゴードン (Marquis Lafayette Gordon) からアメリカン・ボード執事宛てに手紙が送られており、そこには内容は不明であるものの、ラーネットの手紙も添えられていたようである(前掲『同志社英学校からエール大学のラッドの元への森田久万人の派遣とその成果』、二〇頁)。イエールへの紹介状であったのかもしれない。
- (59) K. Tsumashina, "Farewell to Dr. and Mrs. D. W. Learned" 『人道』(第二七六号)(人道社、一九二八年)、六頁。
- (60) 前掲『ラーネット博士伝一人と思想』、三〇四九頁。
- (61) 一八八五年一月二四日付新島襄宛ノア・T・ポーター書簡(同志社大学人文科学研究所編『新島襄英文来簡集』木立の文庫、二〇二〇年)、一六五〜一六六頁。
- (62) 前掲『漱石のライバル重見周吉イエール大学ほか新資料から見える人物像』、三四六〜三四八頁。新島はこの渡米の際、イエール神学校で中島と会い、同志社の教師採用について話したようで、その後中島は適任者としてクラスメイトのマシューズ (Geo. R. Mathews) という人物を紹介している(一八八八年八月二二日付新島襄宛中島力造書簡、前掲『新島襄英文来簡集』、三二四〜三二六頁)。
- (63) 中島は一八八八年一月二日に、新島に宛てた書簡で、イエールでの学習計画と帰国後の進路などについて書き送っている(前掲『新島襄英文来簡集』、二八七〜二八八頁)。
- (64) 新島襄全集編集委員会編『新島襄全集』第一〇巻・新島襄の生涯と手紙(同朋舎出版、一九八五年)、一一〜一二頁。
- (65) 前掲『原田助遺集』、七〇〜七一頁。
- (66) 上野直蔵編『同志社百年史』通史編一(同志社、一九七九年)、四三二頁。
- (67) 例えば、小崎は、イエールで聖書神学者のフランク・C・ポーター教授から有意義な講義を受け、英国やドイツの多くの学者に宛てて紹介状を書いてもらったという(前掲『小崎全集』第三巻・自叙伝、八九頁)。イエール神学校のベンジャミン・W・ペーコンが牧野の留学の仲介をしていたことも、本文で述べた通りである。
- (68) 前掲『ラーネット博士伝』、四五頁。
- (69) 大塚達也「G・T・ラッドの講演をめぐって(一)―迂回をとって漱石論へ」『語学文学』(第三四号)(北海道教育大学語学文学会、一九九六年)、二〇頁。

- (70) 前掲『新島襄英文来簡集』、四一―四一三頁。
- (71) 前掲『同志社英学校からイエール大学のラッドの元への森田久万人の派遣とその成果』、一六頁。
- (72) 湯浅与三『小崎弘道先生の生涯』(湯浅与三、一九六七年)、二五―二八頁、鈴木敦史『小崎弘道―社会の「聯繫」を求めて』
沖田行司編『新編同志社の思想家たち』下(晃洋書房、二〇一九年)、一六―一八頁、前掲『同志社百年史』通史編一、四三〇―
四四四頁。
- (73) 前掲『伊藤博文への博士号授与と日米外交―「文明」の普及をめぐる―』、一―一四頁。
- (74) 松村正義『日露戦争と金子堅太郎―広報外交の研究』(新有堂、一九八〇年)、参照。
- (75) 前掲『小崎全集』第三卷(自叙伝)、一二五―一二八頁。